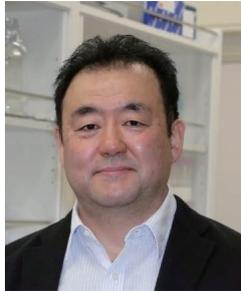


家畜感染症学会 20 周年を迎えて、そしてこれから



後藤貴文

家畜感染症学会 第4代（現）会長
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

新緑の候、皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。本学会の会長を仰せつかっております後藤貴文です。本学会が設立されてから20年、家畜感染症の研究と対策に尽力してきた関係の皆様のご努力に、心から敬意を表します。本学会の会長として、この記念すべき日を迎えられたことを心より嬉しく思います。

20年前、本学会は前身の日本家畜臨床感染症研究会から発足し、2012年より家畜感染症学会として、家畜の健康を守り、感染症の脅威に立ち向かうため、家畜の感染症に関連した臨床的・基礎的研究の発展ならびに知識の普及を図ることを目的として設立されました。また、会員相互の学術的協力を行い、これをもって学術の発展、畜産および獣医療の向上に寄与することも重要な使命として設立されました。以来、多くの研究者、臨床医、畜産関係者の皆様のご尽力により、数々の成果を上げてまいりました。家畜感染症の研究は、単に家畜の健康を守るだけではなく、安全な食の供給、畜産の持続可能な発展、さらには公衆衛生や人と動物の共生にも深く関わっております。これは、いわゆる One Health という概念として現在啓蒙されています。

近年、世界の家畜感染症の状況は大きな変化を迎えています。アフリカ豚熱（ASF）はアジア地域で拡大を続けており、各国の畜産業に

深刻な影響を及ぼしています。また、口蹄疫は依然として隣国で発生が確認されており、日本への侵入リスクも懸念されています。さらに、高病原性鳥インフルエンザは毎年秋から春にかけて発生が続いており、近年も国内外で多数の事例が報告されています。これだけでなく、その他の感染症が国内に侵入し農家経営にも影響を与えようとしています。このような状況の中、私たちの使命はますます重要になっています。今日、感染症の課題はより複雑化し、新たな病原体の出現や環境の変化が私たちの研究の方向性を翻弄しますが、学会の皆様が築き上げてきた知識とネットワークは、この困難に立ち向かうための強固な基盤となり得ます。

私たちは今後も本学会にて、常に家畜感染症対策の未来を見据え、臨床獣医師、獣医学研究者だけでなく、畜産研究者、農家及び畜産関係者とも一丸となって連携協力し、学術の発展だけではなく、社会全体に貢献できる取り組みを模索する場として、充実した議論を交わしたいと考えております。最後になりますが、もう一度、これまで学会の発展に尽力して下さった全ての関係者の皆様へ深く感謝申し上げますとともに、学会のさらなる発展と皆様のご活躍を心より祈念いたします。共に家畜感染症研究の新たなステージへと歩んでまいりましょう。

皆様のご健勝とご活躍を祈念し、会長の挨拶とさせていただきます。